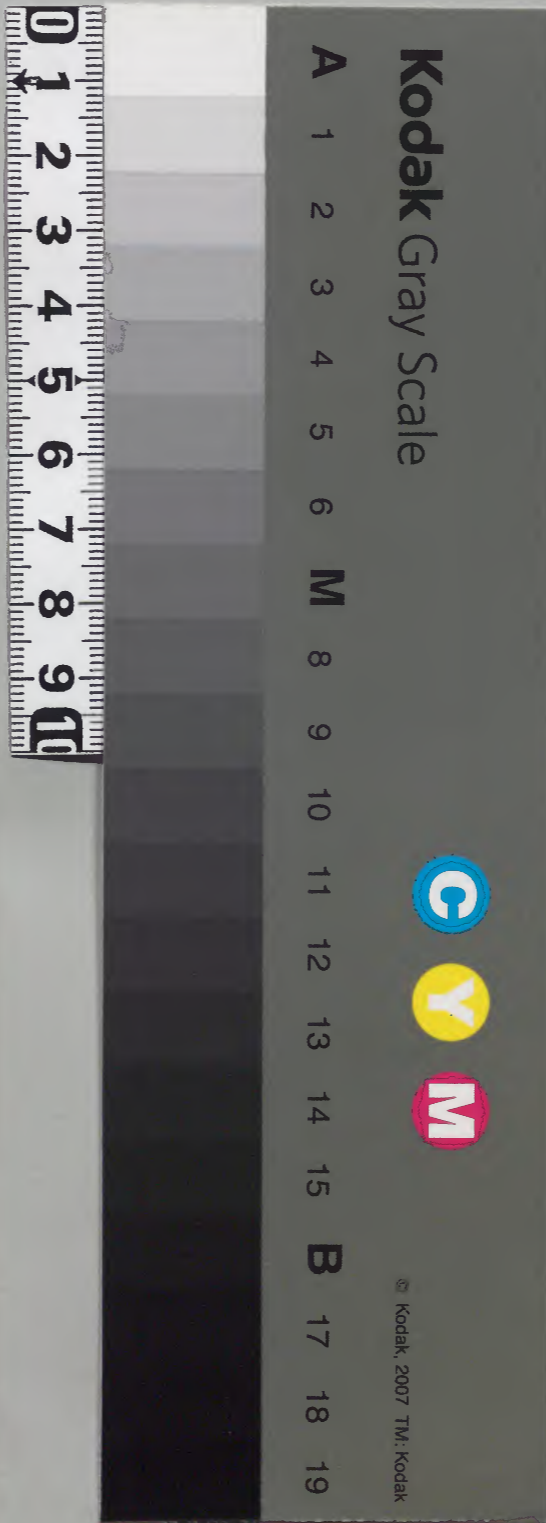


滋苜十拾露

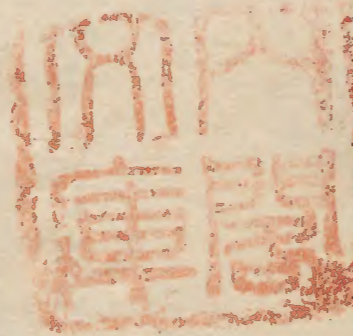
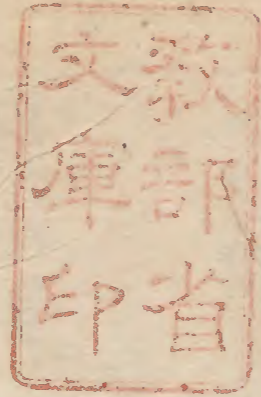
扇

内閣文庫
一四 和

内閣文庫	
番 號	和 29507
冊 數	43 (39)
函 號	147 319



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



續日本紀廢帝天平實字六年八月丙寅御史大夫文實與入淨三以
 年老刀衰優詔特賜聽官中持扇策杖
 丙一〇一五三號

朽木文庫



五骨扇事

内一〇一五三號

建武元年六月二條河原落書之中

六骨扇

六骨扇

薩戎紀應永廿五年六月廿五日

藏入左衛門權佐宣光 衣冠赤衣禊袴也 持六骨扇

康富記愿永廿七年閏正月十六日

泰勤修寺聽有對而已直烏帽子茶浴直垂 六中子扇被持之

親長御記長享二年六月廿九日

扇無文引書花於西而六骨也

海人藻屑 蝙蝠扇 橋事

六骨別當大弼 延尉持之

七骨扇

夫木和歌集第九夏三

永久四年百首扇 藤原忠房

すゑひろは七はひのひあそき扇やいよにけるをたのむ

八骨扇

十卷抄第十

一鞠乃扇の事當流ハツ申のれり秘に事し徳のやひしは
乃扇よりたくら保にぬる 捨に家の文どかく

九骨扇

大鏡

くらゐのゆののゆのつゆるにふぬるかたよりあまあ
あまおけえのり

十二骨扇

迎陽紀貞治三年八月九日

花田御扇十二骨

登藻扇 蝙蝠橋事

十二橋常人持之

十五骨扇

高倉家記夏扇

蕪芳骨紅地花繪骨教十五

廿一骨扇

本源自性院殿記寛永十六年九月十六日村上天皇松室仲算承給下
御扇乃宸翰の哥三首如此春日本續我扇ふあかのほろ御身
かりほろ我身ほへんといのろれ君うちをせにあをむと思へ
君う代にあこのしあらしるれよきくあるしほまぬいとけぬらん
君の世の白かほしき八代とてなるらんといん涙うなげこえ
扇の長さ二人三寸五分七寸五分骨古一本思あよ

越前守助成記

一扇に檜扇あり後教十六枚有花はけり糸色くぬり

公卿殿上人檜扇橋教事

忠光卿記

装束如月頃 寸法不違辨宮時
公卿已後増教二枚

管見記嘉吉三年十二月十五日 今日惠息持後実遠
九多令加首服 稻摸目扇骨枚

廿三

宣胤卿記永正四年五月廿六日

一檜扇骨教事 一册三十枚殿上人
廿五枚歟

式目欽上 檜扇

公卿已上扇重數廿五四位已下者廿二上官儀式官者用廿五重
延藻扇

橋扇僧細公卿扇廿五橋凡僧殿上人扇三橋

蝙蝠扇橋數事

蛭蝠扇橋事

一蝙蝠橋事

六橋別當大小弼廷尉持之

十二橋常大持之攝間骨大臣家料物也

台記仁平元年八月十日春日詣記

夏扇

香深極薄
竹骨數多

蝙蝠扇夏冬共用事

宣胤卿記永正四年五月廿六日

夏冬共用蝙蝠扇每子細依

直衣之時持繪扇事

王業兼安五年五月廿七日

建春川院百日御懺法銘願也參入公卿九大臣持冬扇左大將應同

予云直衣冬扇持欵余谷云不知之由了此事可尋之

吉部秘訓抄

直衣之時夏持檜扇定事之

二水記大永六年五月廿日

万利黄川同着座参進之時持捨扇

此事予不持之懷中着座之後取出之
御小参上之時如然仍憎世儀者之而有夫

衣冠持夏扇事

故實西譚

蝙蝠扇平生用之函金猫骨白黒保子不用之

二水記大永八年四月廿日從今日三ヶ日被行御懺法已刻着衣冠

指貫上給捨扇無汰持蝙蝠扇夏扇事無臣雜
款自余悉以捨扇一身初而有難款但如何

成恩寺殿記忘永十七年八月十九日此日三本席御會覽也着冠直衣平給

同指貫同下袴同張
單亦之例之大惟以上白 刺白参今夜直衣始也直衣色頗深指貫薄

捨摸目扇樣事

淺深秘抄

一扇地六捨之如白泥是ヲタム以余昔縁音以鶴松龜以打濃糸
目貫之垂小給松枝付也鹿目蝶小鳥以銀造之

杉横目扇事

高倉家記

本あり錢子ふめふして數廿三枚金物蝶小鳥面六繪をひくうら
多そててうとり紙の糸くの糸くやれ紙む紙紙
又花紙銘にいな小月之急し時小志了ふへ
木莖葎葉

十五歳以前、松目乃少きありしひすひして梅の花に
と儀多て扇小月也

年光公卿夏扇事

年光公卿夏ハ裏面小薄木散紅綿紙扇持之知案内事ニ

夏時上達部不可持煽蝠事

小右記長和四年閏六月廿四日

今日大納言尊堂周忌法事於北東北院行之今日中納言行成持
煽蝠扇是專不可然事也上達部作法不失例之者也

夏扇并賀持之例

玉葉永安五年四月廿七日侍從良通并賀赤色紙書繪塗細骨教骨也

扇

盛秀記嘉曆二年七月廿日今日頭中將殿宴守十五日可奏慶令後事

給縫掖御袍羊臂下襲如紅一倍支赤帷箔緣綾表袴禁裏郷服之昨

日被下之馬眩帶蔣繪螺鈿如嘉禎御紀在御次者馬眩帶螺鈿

鏡通寸法常仗貫首於為雲密已後歸於馬場奏慶依之帶螺鈿者何限帶用馬眩帶足

又不審意所於搥螺如者西方通用蔣繪鈿中搥ヤル件搥具ヲ摺之以之於搥螺

鈿通州件鈿令相尋給之知不出來以合帶薄繪螺鈿給中具相交也是久通用者也 紫終平箔并賀也夏扇等也

玉葉治家元年三月二日中將良通并賀裝束色目如常上唐草

棒扇如笏持見苦事

明月記建仁四年正月御幸始

三位中將 直衣帶劔紫談更指貫不取笏
捧扇如笏持卷入

同記同年同月十二日 御幸

定通仰持扇如笏持龙舌亦見聞夏也袖ヲ或テ持 帶制
羊靴 是每事

也中納言中將殿後日被仰云直衣之時ハ笏ヲタニモ六ヶテ士
トナリ持テ卷ニキ之是殿下仰也捧持ハ見苦之由被仰之

白記同年四月十七日 若宮行啓

三位中將定通直衣武嘗捧扇如例

馬上之時扇差後夏

五代帝王物語

正嘉元年三月廿日高野(寺)有(あ)~~~~(う) 箇少將基頭扇ヲ折テ

此月ニサニテクセ物ニ乗ラ場久ヒクリニマコトノ境能トミエテ面白ク待キ

馬上差扇於面事

百鍊抄 後鳥羽院

宝治二年六月廿七日大宮院亨後初入内内大臣已下供奉々々内大臣於

路次馬上被差扇於面

玉葉嘉禎四年二月七日

又遣久八幡賀茂行幸如法未明出御日出後大路左右侍共被扇子故

入道同車見物過其前之間取扇被入懷中如此往事等條々被諸

以扇鳴笏留人事

小右記治安元年八月廿一日

余出陣向北之間以扇鳴笏史留居

都記長曆四年八月廿二日

上官未追俊被出西門之間外々記右史左自左右前行右府於川外橋
上以扇被撐上官跪称唯史記女許北行暫留立

扇取副於弓事

小右記寛仁二年十月廿二日 今日幸上東門院

左少將顯基四位上達部作法不恒取副扇於弓每使宣

競馬日賀茂森賜扇事

御湯殿記大文十一年五月五日

賀茂のゆりけいふふゆめふふふふ

同記 弘治四年九月九日

けいふふゆめふふふふの森とらへりら

以扇若笏指示留人事

北山備志略記 大臣退出事 外記史一人從大臣左右——大臣
至屏角一柱之間以扇若笏指示可留之由

西宮記

一大臣自陣退出事

外記史各一人外記右從大臣左右趨進且趨且向大臣北至東屏角

二柱以扇若笏指示可留由外記史共跪称唯各退前外記立局以前

玉葉治承一年十二月十五日

内弁召宣命使以扇被鳴笏

以扇撐造緒事

玉采安元二年三月廿五日。此日始候官奏史如礼紙卷訖之間余自懷中取出扇小間ヲ以其妻撐造緒於板敷端以右手撐造也又扇不指入鉢中只撐造即懷扇

夏扇冬扇事

後二條園白記 寛治五年二月十日

殿下御使盛長朝臣来云、而相逢御消息之旨、兼之與言無極御使無祿衣仍云、矢相加夏扇給便云、

飭抄扇

久安上十日吉行幸三位中將兼長用塗銀泥書菊之冬扇依禪同

仰也

明月記寛喜二年十月十九日

資雅出仕殊叶處慮於夏有其奏云、寅日持夏扇也赤扇也

仲資王記建永二年四月十六日賀茂祭斎王出車扇祭日還立日冬款

夏教骨赤紙 異様物欣 又被石扇二枚各流繪 松實也

可はす免装束抄

内はり乃は流乃はくしる内はいり乃はすけのいし車の
ばきぬ代りをもかふぬもはすしぬあふさからり
乃は日の紙を流はのふふぬあらしぬもあらしぬ
をのりの持入と夏のあらしぬいしぬ

長秋記天養元年四月三日

齋院兵女房御御冬扇內殿上人調進祭日藏人所白鶴水扇歸

日院殿上人調備扇御禊祭御料御服所調備歸日夏扇自院被

進今年此定被催而長官右賢朝臣半之御禊祭兩日可用藏人

所扇也者

宇槐記保延二年九月二日今日鳥羽競馬也辰刻着衣冠

參鳥羽北殿予裝束衣冠紅巾出衣薄色織物指貫文友九也白袷生

單衣白下袴帶野釵持夏扇依大殿仰也

東鑑養元二年三月十七日神宮寺某師像用眼布施裝束念

珠置扇

同記正元二年二月廿七日破金百兩置銀相摸太郎殿申延置日相

摸次郎

同記文治五年七月廿六日賜御扇出月

夏時危者可用檜扇事

後愚昧記元安四年四月十九日前內府送狀云又直衣之時雖夏危

者持檜扇事奉置之様覺悟為何様哉云云一次扇事雖

夏大危者用檜扇之條先規勿論也者永行六年七月十七日大臣以後

直衣始也白引ハ後指貫持檜扇

束帶不持蝙蝠扇事

旧記拔書

一字治左府束帶之時汗時不持蝙蝠扇

扇置概管作披置之事

愚昧記嘉元元年二月十三日 皇太后行啓日言此間諸大夫不取管
圓座一枚敷寢殿西面右側兼光持御扇 概管敷紅薄榻其上
置赤包御扇一枚置之

直衣之時夏扇持槍扇事

壽永元年八月廿五日成書提院彼岸絡願也 刑部卿 須補直衣
持槍扇

右記 身覺法親王作

一持冬扇事 寒中無用之上者不可帶也云云凡不限翠黛楊氏
可及緇襟華卿者欲雖然扇者夏扇代也冬用之強非可惡似有禮法
但冬用檢扇暖暑之比用蝙蝠扇事云云冬扱向用蝙蝠扇之人

可有携蹴鞠之藝堂之、一童奉御爵之時取髮未挿腰側左右意
扇置席罷立訖差腰立說有一樣笏者必差腰罷立云云古樣式雖
尔當世左腰立交相似有肝充宜也置席罷立之段不被二見骨式也

於御前扇不可取出事

富家言談

仰云御前下天不可取出扇但極熱比竊取出天自閉仕事之ア上毛
又可納懷中者也

持扇事

作法故実 持扇事

衣冠直衣布衣之時也持扇之時為步行者令懷中空手也居座之

後取出而持之或又對人立而徘徊人取立可持之也

馬上右殿差扇例

明月記寛喜元年三月廿一日

辰時恭殿九條殿廿院 家平朝臣忠高奉行等恭前駈ホ恭御前

仰云供奉人猶雖遲恭早欲裝束一

侍從能忠右殿指赤扇此事称故実

鞠時差扇事

推继御記

一あふさうり事

あふさうり事にいり。亦右ふらすむハふえいといふ事なり

後ふらに張いぬれいしと云々かこのうらとをちと右へ

あけてあす之又あふさのうらと云々張らうかこのうらに
かあふあひれいさ張らみのをさにはいりしれども道く

難波家託

扇をらし事

扇をらし事。扇をらし事。扇をらし事。扇をらし事。

扇をらし事。扇をらし事。扇をらし事。扇をらし事。扇をらし事。

にう成

傳抄 扇成腰より事

或云都督顯李師成通卿外祖父之說云腰よりすのれくは神の扇

小如扇とある之れはあつたる之れはさしき

師説云近実ハそれよりすにらせる成年はなすはさか

るは是よりて年平の扇とほはあふさふ之き

深頼云資夏もせあふさふはさしき扇のぬくはた

によはさしき人あり又扇れくひ乃やうに右のさき

にらすはさしきもさしきにて用之

以扇直啓事

上卿故實 後着端座事

自直皆 左手持皆以右手取扇末之
直皆自鼻而外面

薩戒記元永正三年正月六日

大将起座移着端座 兼入扇於衣袖内以右并取之

二水記元永二年正月一日 奏慶中納言着陳

次將笏於左手取出扇 兼以扇上为
丸方令懐中 置前 袍前ヲ
ラモトニ置取渡勿於右手持

笏上方直皆 先左次右扇ヲ皆ノ後ニ入ラタスハ直ニスニ
而裾脚懸皆仍不自由也不可説 后直刷衣黨右官人

玉葉 兼元四年正月一日

頭亮清長朝屋来就余座下方印之内并亦余或笏 頗向座下揖頭退之

间余如本居直退一次予起座皆迴挂内後着外座 予仰云 軾官人

柁唯退去持来 賦教予方地余密仰云 皆直ヤ 後法性寺殿所流皆悉
如此尋第合扇直之

十月十七日 此日 軒廊下并弓揚始也

答揖立着沓自座未北行更折西柱内西第一间中程立留揖懸膝昇
着文揖向居座未方引下重尻於板敷端次次扇直沓次官人仰敷軼
下昔是日依彗星御祈於南殿可被行御讀經僧各定日日之着陣鼻
座頂之藏人春官文進仲房来仰之依彗星御祈囉六日僧放南殿可被
行大般若御讀經日時劬甲也予正第自之仲房退次予移着端座以扇直沓
令官人敷軼

作法故実 直沓事

在陣端座納言自直之置笏於臬方自懷中取也扇以彼日方入沓焉之
方引廻後可着撤宿德人以官人直之又度着陣雖非宿德人以官
人可令直之具軼有口傳

玉葉 兼安元年九月十日例幣

着北座川西揖以扇直沓在

同記喜忘三年四月廿二日

次着陣座行賑給定事其儀先着陣鼻座則左大弁実細之着座

次余起座移着外座実細先起座余移着之後更着座也

告記元曆二年正月一日

頭中將望出仰内弁於堀川大納言次内弁移着端座中略取出房被日

笏以右手被直沓

玉葉仁安二年十月十六日新嘗令令祈端座令官人敷軼此次令

同記喜忘二年二月十日祈年敷奉幣上卿次余移着外座以扇直復

同十五日祈年穀奉幣向八省、着北廳西第二間、兩面半、怡一月、以扇直當
 同紀五月廿三日、賑給定、移著外座、以扇直當
 同三年四月廿五日、賑給定、移著外座、以扇直當
 同六月廿八日、齊主余著陣、與座、次後著、以扇直當
 同記安元二年三月廿五日、始、官奏、移著外座、以扇直當
内弁之時、以置、瞭、突、之、官、人、令、直、
履、官、奏、之、時、以、羽、自、直、之、如、常、法、

一扇、物、書、六、繪、ア、ラ、其、心、ヲ、可、昏、也、給、ノ、所、又、可、除、也、又、主、ノ
 扇、ヲ、給、テ、憲、ノ、歌、等、ヲ、ハ、不、可、昏、祝、言、ノ、歌、可、成、晝、目、折、目、不、書

但可依躰也、其故ハ一條院御時扇合ノ有ケル唐帝大骨張タル
 ヲ面ニ直ニ裏ニ草ヲ被、爲、昏、鳥、ヲ、殊、御、秘、藏、有、有、ケ、ル、隨、事、可、昏、也

扇橋色事



枕草紙第十

扇乃由の青紙青紙紙、赤骨赤骨、紫骨紫骨、緑骨緑骨、白骨白骨、黒骨黒骨、

未廣七骨扇夏

夫木集扇

永久四年百首扇

末元ら乃七つ由の白紙はる扇尾の道ふけりれとのたふら

紫扇事

同集扇

ふりけるぬいさしきたのちふきの風のまは

香扇事

花内記文永十一年十月廿二日

摂政持扇香扇件扇松本ヲ香ニ染以白糸刃之被菸云香扇者

老者所持也

保安四朝記云服筋部類

殿下御参香御檀扇

保延四年二月四日春日祭宇治丞相上御宋帝香染冬扇

相模目繪様事

管見記嘉吉二年二月十日愚息実遠九カ加首服装束相模目扇骨

紋共三松梅雀亀等裏ハ蝶小鳥也

夏時老者持杉扇例

吉記壽永元年八月廿廿日 成善提院御念仏
表仕公以

刑部卿 賴輔布衣
持於扇宿老如此也

香檢扇仕年人持之事

妙槐記正元二年四月七日晚頭奉花山院謁大納言被談云靈山宰相
定長日記比間借受民部卿忠高本書寫之其記有所事等

香深扇事 故花山院右大臣 先公也 三位中將之時被奉院之曰被用也伴

香檜扇檜目ヲ兼テ被用也若仕年人搦檜目ヲ不持テ檜檜

目ヲ欲持之中間可持伴香扇歟云々

先年故園屋禪閣攝政之時取勝講之時被用香檢扇是宿老
事歟非仕年儀歟

夏束帶時紅扇事

園大曆文和二年六月廿廿日

德大寺內府送仗實時朝臣行奉供奉事也所為注付一又紅扇六塗骨彫
骨二十八只、黑骨、彫骨ヲ用ヤ二塗骨八若如此初女之時平例

不審為恐、千万又、可進、誠恐謹言

六月十四日

於陣座間扇用之事

山槐記治承二年三月廿九日

此後權中納言扇云暑氣不可堪背法可用者予隨之曰申文之後何事
之百哉六角宰相、中將申文以前用扇是之有傾思歟

桐竹泥繪扇事

長秋記大治四年十月廿四日辰

申刻皇后宮太夫送舞姬裝束打神一重合袴一腰桐竹泥繪扇一枚裏
白絹便内舎人心景

鞠扇事

心鞠秘傳抄

一扇の事地、あらし文かす之はゆれぬる扇一之、家の文
ゆりこゝろハ四葉の陰多し一ゆりの福あまはるしくり
ゆりハゆりの扇の骨よりハ之
紫紙蒔給骨紅紙黒漆骨扇

長秋記元永二年七月十九日

依石元日四官御扇持卷院 紫紙二枚蒔給骨銀假目裏紫薄様銅松銀窟
居其上紅紙二枚黒漆滑入銀篦尾裏江薄様造銅
竹銀篦伏居之四枚表裏皆施祝
給字筥蓋敷祖紙裏其上桐竹下陰

銀骨書繪扇事

八雲御抄

寛和八年月宴廿哥三首自簾中出薄様置扇上 銀骨
唇圖

細面扇事

兵範記仁安四年二月十二日 赤色細面以川糸貫之
蕨人治部女侍兼光
次救使持卷御扇 無絲柄筥被道之 直追入簾中

愚味記同日

兼光持御扇 柳弓敷薄様其上置
赤色御扇一枚作披置之
明月記嘉禄元年十月十日

扇近代檜扇 細面塗雲母カニタニカキノ
五六分許ハ形 書繪 遠山野之筋 金釘牧目以村濃

着青糸貫之系未銘無物也

五重扇事

源氏物語 手習巻

いさあけしつらわりのうらみあはさひろけくをくふ

枕草紙第三 あてあさしの

五葉力ねふはけしる三重りさのあはさいけくあゆりあう

てましめくふらげり

三重扇様事

至徳記上 源氏抄物善成談
相助開書

一櫻の三重かさの檜扇の両方上三枚の板の薄振あてはくみ

とる糸あてとりてあはさひの板りあは

冬持夏扇事

明月記寛喜元年三月廿日 競馬供奉

侍従能忠 右腋指赤扇此事祿故実
先者此事

同記同二年七月九日

資雅出仕殊叶慮於事百其誓云々寅日持夏扇 赤扇此事頗

技群事 歛

山禊記治承三年三月廿四日

右清水臨時祭

舞人少納言惟基

着赤紙扇如何
是方細言事忽絶之
陸孝

詔問抄

應安四年

經顯正問
公忠云答

一 檜扇事

大臣於夏枚常如云々其枚之但冬長久供

一 襲時扇事

先人雖夏時直衣以下持於扇三條一説
不能右左然而蝙蝠扇又無思者云々

紙糸泥繪松窟

峯記兼久二年五月廿日 皇太子三少御着袴也

此河平候官御前亮資頼朝臣未傳院仰云云被具御裝未御扇繪
須紫欵申云代之例不恠所是但當例紫益泥繪欵則自院方同

被敷御裝束

御服野
調進之

御直衣

白小葵浮文
御物裏打

打御衣 紅打葵

合御袴

紅二打御帶
打直衣
地

御扇

紫泥繪
查松鶴

扇張薄物事

拾遺利奇集第 七

七月七日に官より四の本心人前奉られけるありき云

もられし侍ける字にゆふりはけて侍ける

天川くさせすしきまはれあさる風を紙をうらさし

有請扇事

小大君家集

扇乃也ひりれーきとせしむるはひてあまのよとゆら
水て給をせよふ都との卯花さひていくさあつて
ーヤハヒヤ

月出扇奉

新古今集

ほしーしーのりげの女月也ーきとせしむるはひて
くみ人あつて
都御をあら乃西らに也ぬー月みじしひ思ひあつて
大あーの女書扇奉

人のあつてよ大あらまのうーかあて侍の
と侍奉

夏之ぬふはまにあたる大あつての杜の下草あひとあつて

竹葉露道修書扇奉

玉葉集まの也

む月をのりねとてあつてはあ人の竹のよふ花
くさるるる花かとして侍奉
和泉式部

志以先不致まのれーくもとくーくの中竹のんの花

辯治女人書扇奉

住万物語明日記天福三年貞永二月廿日源氏繪同内府被言

大酒言なりけり因みりや女房あづかきりまける新おんけい

けきいよのく比あよき候又いにとりてみげあひ弁比はりて

けり人なまきたるけり女房も北くねなるひよふたのねま

とらりてふれりしちちあてはくの園てかきとあも花

ふりての香もろくとく人のあたるれありとあも南にホ

まのいりるれし北りてあもいりてきりりるはのまも

ふれせ今きたりまらならあていんようめりや

とて源氏の下髪あきりひみりりりりはりあひ

やふまらるるたのうき色にむさつてあもあてありへ

後序多記新記とりけり折巻もふゆ及大掛つらる年ふ

香のいさかなのいさかのゆとにま紅り麻

花のいさかなのいさかのゆとにま紅り麻

衣名記傳也指貫は遠文輪違中菊文中菊文

衣名記傳也

枕草子

あまきをありのあまのひのひのあまのひのあまのひ

此言たらつるをり比若り

大鏡三 右大臣御輔

みまらるるはらるるはらるるはらるるはらるるはらるる


~~~~~

足持首丸後意應奉

人鏡序

くらひいふ不のひえつあふ。黄泉<sup>よみ</sup>の紙<sup>し</sup>をうらみし  
から〜〜

色々の前奉

之履<sup>つゝ</sup>方<sup>かた</sup>政<sup>まさ</sup>大<sup>おほ</sup>臣<sup>おみ</sup>伊<sup>い</sup>弉<sup>そ</sup>命<sup>のみこと</sup>敬<sup>あやま</sup>之<sup>を</sup>一<sup>ひと</sup>篇<sup>は</sup>〜  
〜  
詩<sup>うた</sup>之<sup>の</sup>又<sup>また</sup>幸<sup>あき</sup>余<sup>あま</sup>出<sup>い</sup>乃<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>統<sup>と</sup>よ名<sup>な</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>

うんきれあ〜し〜  
〜  
〜

あまの後<sup>のち</sup>ふえ<sup>ふえ</sup>〜  
〜  
〜  
〜  
〜

秋風<sup>あきかぜ</sup> 出<sup>い</sup>る<sup>る</sup> 繪<sup>え</sup>奉<sup>ほう</sup>

更衣

中<sup>なかつ</sup>持<sup>もち</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>輝<sup>あかり</sup>の<sup>の</sup>野<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>か<sup>か</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>風<sup>かぜ</sup>に<sup>に</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>せ<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>  
あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>〜  
〜  
〜  
〜  
〜

らるゝとららるゝと

まう言にふ初けふ秋の巻すまき世すまの風かゝるとも  
あつらよまのゆ花はさし萩の花あまふゆらるゝらん  
いほしとやいしりふりきすは初ねて

妻紅扇奉

遊庭園書

是後片多院香のう衣のうよばさるゝあゝい  
うのわの二三ゆらばさるゝうばさるゝあゝい  
かゝらるゝ

遊庭秘妙

まゝいひのよまのの行成花はあひのうらさるゝうばさるゝあゝい  
ゆりてまのあをみのおはさるゝのうらさるゝあゝい  
あゝいひのうばさるゝあゝいひのうらさるゝあゝい  
うらさるゝあゝいひのうらさるゝあゝい  
あゝいひのうらさるゝあゝいひのうらさるゝあゝい  
あゝいひのうらさるゝあゝいひのうらさるゝあゝい  
あゝいひのうらさるゝあゝいひのうらさるゝあゝい  
あゝいひのうらさるゝあゝいひのうらさるゝあゝい  
あゝいひのうらさるゝあゝいひのうらさるゝあゝい  
あゝいひのうらさるゝあゝいひのうらさるゝあゝい

白葉下岩明集文扇奉

又水集

一冊乃言の仲扇の傍小葉にのこりに記し

葛代乃いそひに秘伝帯夏心く常盤乃あまをいせふ

益山諸歌入月方扇事

頼政集

ある女乃もと山のもふ月入んとすわゆいふさる  
子叶はのり候とて

宣嶋舟数文原中

祐筆家集

千と乃おのちえの海心は、軒六のまけりいん秋扇の鳥

此のふまに此の軒屋花せん下りくふくふあふ

三十よりしそ屋をる小枝あらー乃嶋といふ

書てふいどかむるふとそ

益男女並伝扇事

十訓歌 可堪忍千諸事之事

高陽院乃仲らふあ南に男と伝て男女おいあは

りあふ秋下そにさる

專出月扇事

平家物語 女扇の扇はた月七とる扇の志ま

魚鶴事

大記嘉保二年七月九日 扇一枚魚鶴

畚木深衣扇事

源氏物語 紅葉賀

かまよ乃えぬらひえりきもる秋ゆへてわもき道もふ  
あしそてはつあき紙のほろもやに木舟の杜のし  
休せりらしきりかほはこふもきひしあなたまは  
くみ森の下まぢひめしあなたまはこふもきひ

魚霞月扇事

同 卷宴

はら乃らうららめやふまふかすめ目やあてぬら  
はき家紙のれきふまてはくらぬてなしきり  
草乃らうららめやふまふかすめ目やあてぬら  
心らなほきか紙の目のせし紙のれきふまてはく  
ら

明星折

何擗扇乃両方はう三重はらに金うはなほみえいらくの  
糸うはらそとをちいひはるがてなむるも上重え  
日風情なり

魚微塵旅人扇事

新千載集

と野小武平下は小宮より宿屋をせけるはるる  
旅の万有とらに書付侍ける

法性寺入道前大政大臣

草万々

後撰集

人波の波のひそひそくうあつてはありあり  
けんうりの人うあひりりす申してけきえあみ  
はらう志そあふきにらゆのうりきたるはけ  
はらうけ

源庶明朝臣

はゆとらばあきとゆゆの屋のふねあきいさめん

日指出有旅人給乃宿事

枕草子卷三

ゆわらよのまはれけふのむらうにたふり子籠と申小  
かほはにの目もをぬやにらして旅人のあるとらう  
中ねのるふれいもあひいあひいあひいあひい  
京にり雨の降にたふりる人た書とる

実多公記應永二年四月九日右大将慶申 早且着装束

蝙蝠扇

形音  
有画卷

人車記仁平三年五月一日女房為前此追善與小棒物各皆扇三  
枚念珠一連置之

枚扇事

清女初言枕草子第

いふ内裏に東城北の陣よりふたぎの木にたるときうたてて我  
こころ花くさあもむねいふに推中ねのりしより山らふに定  
澄僧都のえさあきに乃せそや其のさゆひし山階寺の  
刈當ふ成てまらこひよのる道途はくはあて申若たあふ  
一ふてきしひし山あそきたれあひしきふもぬ後雨の  
すもえと扇ふりし世話あやいしゆれ意あすきふしはあ

九條家夏扇

夏扇裏

泥川泥橋何くさかふりい  
多分小尊小鳥又ハ蝶 秋津鳥

螢みか貝子鳥川の類と出たか多くと表若若浪山を  
へも字りいなる貝螢の類新樹又秋草乃類と蝶林はひ  
してくわのりし取合ふをわのとりしけりけりさあし  
ツたひ

雜三則故事

後拾遺和歌集

三月よりよりふのち藤原為忠おたり侍けしに  
あまき給ふしとぬらふ校あふとらむむしむし侍り

選子日親王

行春小

大和物語

三條乃右様かゝる——之所よきとて御家君乃昔々  
いふかゝる事にてかゝる事ありし事かゝる事ありし事  
かきたる

おしゆいしゆも分ハ 後々いつはあひしる也此ん

拾遺意草下

人のりらたまふふの山つたはたしむるもかゝる事あり  
あつたけり意成す事との山つたの事父一ん

後拾遺集  
後乃拾遺集の事なりてはたしむるも水茎の跡

太皇太后宮城東三條に傳り給ける事乃其書  
宇治の前太政大臣乃君の侍るにたき有り

伊勢大輔

ほとほらん

山洗御集

三條の太后宮より こやちとてなりし人の事ありし事  
此り傳承し事とてたき有りし事かゝる事ありし事  
ほつてし事なりし事たき有りし事

續古今集第八

花のうらみもよしのさやけしほり

貞慶上人

古くはゆきさきしるし

山家集

近きもよき若好よりて痛く書てはひもふ

廿房六角面

君のめんかきふすき振さる名所形は風まふらん

拾遺集

院中所六月庚申府合のふく左のふくの府ふ

かきしるし 三条宮よりりきさるり 清範朝臣

しそききさるり

治まの浅く春の風まれは四の浅くもよきさるらん

後拾遺集廿六

藤原頭朝臣臨時祭の衆人よきゆきさるりよお見車

たり 扇の浅くふくさるり

よえんあつは

古の浅くもよきゆきの山のあつは家まよきゆき

明月記元仁二年四月八日

所く有僅仙もよき 廿四房布施多教府府 宿の問答之射也



万来くみ才上老の彼  
九條二位隆輔拾扇の妻御かす

跡つめくも御代の

新千載和奇集春二

硯のゆき小散を紙紙合を松尾扇小かきて瑞子内  
親王不ばいせ

形とりのおぬいする宿ふ散るも扇の風ふはくはきいえよ

訖

扇代花もさきふさくくすあひろ小ぬぬ

下学集

扇 本朝之初無扇是物煽之羽学之故扇形  
相似煽蝠羽又高代雄尾周代六鶴翅三羽也

道意僧正記建武元年九月廿四日東寺塔供雜事

上童一人持衣 上下畧 本結紅薄様 扇又リホ子ノ  
有薄 皆エリホ子ノ 着皆

公親卿記正嘉元年十月十日映助年十親王出家

御装束御道衣 浮織 蘇方御衣青御草紫日又御指貫御扇 蘇方  
匠繪

山梶記治承二年六月十七日初度中殿御作文

太政大臣 師着直衣延久三年土御川右大臣為上首着直衣  
参入之例扇骨如冬扇張薄香紙

塩袋欽卷卷第七

當時扇、日本にて造始也見煽蝠已ト云リ故其形煽蝠羽ニ似ル也  
爰ヲ以テ源氏三三扇ヲカハモリトス

五雜俎卷三

元以前多用團扇作素為己未未有摺者元初東南使者持取  
頭扇其夫已因朝始用摺扇出入懷袖殊便然漢張敞以便面折馬則  
又似今之摺扇也

榮菴物語

くけん

寛弘三年春日祭歟

後院御車

御車のまのまゝに上へ花をまゝに色くはりてあそびしりき

あそびしりきとひらめくはりしりき

袂衣

うはまがけのゆふのききかせらよあひてしりきとせしりき  
ハねしりきとせしりきとせしりきとせしりきとせしりき

らぬかたをよのらぬかたをよのらぬかたをよのらぬかたをよの

益鏡子一 阿比呂行

文永七年六月十九日 一院いそらふみきせしりきとせしりき

阿比呂行 一院いそらふみきせしりきとせしりき

阿比呂行 一院いそらふみきせしりきとせしりき

阿比呂行 一院いそらふみきせしりきとせしりき

明月記寛喜三年六月十九日

資雅出仕殊叶敵慮持事有 答云、寅日持夏扇小扇此事頗

拔群歟予在所聞今年類亦合宰相之由聞之級中將只可持

由一密之、所相計也

玉葉第八旅哥

藤原資隆朝臣志心少海と承徳の方子より

扇の事 扇は二丁子中不徒はかゝぬ扇の事は不徒

はれ

前左兵衛督惟方

かゝる事ども人の子の事どもは是れよとせとて

雜事 延尉渾正

扇 冬檜扇在置物夏花田  
或香朴木六甲子

大府記 嘉保二年七月九日

帥大納言經信 奏西殿下被申越任之由先被奏關白殿中畧次引出物

野釵一腰 盛錦袋道良朝臣 靴之  
直衣裝束一具 薄物直衣紅打合衣草衣白  
襖袴薄色織物奴袴扇一枚

織物袋

後妙萃寺殿記

扇事當家 藤九ろ老後三己

古事談

後三條院令事候約給之間御扇骨松三藍ヲ塗テ合持給ナリ

三山口傳抄

中山 三扇不可露頸

紫式部日記

かゝる事ども人の子の事どもは是れよとせとて

いささかたをへつるし、あつらひ、たつたつ、りんやんはの、ゆきまひ  
流れてひひきをあつらひ、いささかたをへつるし、あつらひ

山家集

ふりかへり、あつらひ、ゆきまひ、りんやんはの、ゆきまひ  
ゆきまひ、りんやんはの、ゆきまひ、りんやんはの、ゆきまひ

園大曆 文和四年十二月廿一日

徳大寺前内府送消息被尋子息三位中將并賀年始節會日  
通用云其間事示所存付

一扇事去年

又忘却挨先日者是程、宮位、年齡

猶檜模自

いささかたをへつるし、あつらひ 檜細面是非松横目自恒常者小白糸貫絡垂物、て切面ハ

別、其躰侯平又常のより せいはらとる 細ニト、キ、躰、又才垂、

了物、松の横目のなま、り 何れと有之 長、長、長、長、長、長、長、長、長

長程、ヤ、ん、是ハ松横目のなま、り、の、指、く、巻、く、あ、つ、ら、ひ、只、右

卷、い、様、物、の、は、ち、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

下蝶、多、白、糸、貫、絡、垂、物、を、生、か、つ、ら、ひ、ぬ、く

通推卷三三十三

褶扇起、高、而、盛、文、日、○折扇之妙、則、地、將、為、盛、古、但、有、團、扇、直  
扇如張、故、使、而、之、類、耳、方、面、障、面、折、紙、薄、扇、也、今、世、所、用、摺、疊、扇、亦、各

聚頭扇子淵日張東海先生以貢於高麗永樂間始盛行于  
中國中畧東坡謂高麗白松扇展者廣天餘合之止而指許至今  
摺蓋自北宋也有定智按遊官紀聞曰宣和二年高麗貢松扇三合  
摺疊扇二双倭人亦製為泥金面為竹骨 貢唐顛有扇殆亦  
折扇之萌芽乎

峯記景久二年七月廿日春宮御看袴

自內裏被猷御裝束

御直衣

御扇檜白泥繪以紺青綠青松雀以濃糸貫之以糸結小松枝  
付之銀蟹目蝶小鳥寸法頗小々々御扇以檀紙二枚疊之

筥抄

一扇

公卿宿老三人東帶之時不論夏冬持檜扇直衣之時猶持之年

女公卿或炎天持蝙蝠冬年女之人橫目扇散薄持之

久安五年吉吉行幸二位中將兼長日金銀泥画菊之冬扇依禪閣仰也

香深扇事

保延四三春日祭宇治丞相上卿東帶香深冬扇

若大臣持夏扇事

保延二九二鳥羽競馬或秘記日予衣冠帶野劍持夏扇依大殿仰也

童服扇

保元二土廿八或秘記日重暖之後始出仕扇扇鉞色至十扇者夏  
冬改之

諒闇扇事

冬扇如尋常但不置文云々西度諒闇諒闇院或置文夏扇

槿色薄香或花打濃或仕人散薄ワカキ

衣笠内府淺深秘抄

一 年老公卿夏裏面尔薄不敢紅檀紙扇持之知案内事也

一 宿老人能我不思時杉檜目扇持之故実之近代昂八條大相因

实行泰公家寂勝講時着瑠璃色下襲持此扇其外例多欵雖

忝訖細言我尔思人不可有其雖然者先例多尔依官淺深持之欵

一 東宮着袴裝束之中有柶構是讀振人々不分明但或記曰夕凡々

秘夏也欵

一 同扇北柶也以白泥是ヲ么么以金玉綠青圖雀松龜以打濃糸

貫之糸結松枝付之鹿目蝶小鳥以銀造之

式目抄上

一 樽扇

公卿以上扇重數廿五四位已下者廿三於上官儀式官者用廿五重

ヲナ且巳上摺目有紙金物色但依官欵

主上春宮白御樽扇有金物御束帶之時獲芳有金物六

位威人至廿余杉目ヲ可用也於重貴賤不依年齡可用杉目

也或白檜扇ヲ云近代多用之

一 白横目扇事

色、糸、テ、テ、許、テ、繪、モ、カ、ス、花、モ、付、ス、可、然、若、人、若、八、威、人、ホ、  
モ、用、之、其、後、者、普、通、檜、扇、也、若、時、ハ、置、物、ヲ、長、ス、自、中、年、者、一、文、  
或、可、依、官、位、或、置、物、ヲ、セ、ス、白、糸、ヲ、ニ、テ、ヲ、結、糸

主上春宮常如此宿老入無置物因糸ヲ三寸許二筋引糸  
宿老入用香檜扇事一説歟

一 夏扇

束帯之時ハ公卿上官儀式官ハ用檜扇如冬具外者用夏  
扇歟

雜事抄上

一 上皇御扇事

御束帯之時夏冬共御檜扇板敷サ五枚はぬの白<sup>り</sup>を  
置物の長短と御年<sup>齡</sup>小<sup>し</sup>し<sup>し</sup>又内<sup>の</sup>御方<sup>れ</sup>こそ<sup>て</sup>禊<sup>音</sup>  
物<sup>ハ</sup>御用<sup>り</sup>や<sup>ら</sup>せ<sup>し</sup>と<sup>し</sup>御<sup>衣</sup>鳥<sup>増</sup>子<sup>又</sup>御<sup>衣</sup>御<sup>衣</sup>直<sup>衣</sup>ホ  
乃<sup>時</sup>冬<sup>ハ</sup>御<sup>檜</sup>扇<sup>白</sup>置<sup>物</sup>也<sup>又</sup>の<sup>と</sup>し<sup>夏</sup>冬<sup>ハ</sup>御<sup>衣</sup>也<sup>ハ</sup>  
り<sup>り</sup>扇<sup>也</sup>

一 親王御扇事

白檜扇板敷亦置物之御束帯ハ夏ハ御檜扇也御直衣  
以下ハ夏ハりり扇也又十五<sup>六</sup>ハ目乃<sup>三</sup>御<sup>衣</sup>也

し持るす

一横目刷

板敷サ三枚繪成りくく蝶小鳥房くく金りれ蝶ふり  
色く糸の小ふを紙法を付なり

雜事抄下

一繪紙事

板敷サ三枚を和紙白糸練云御辨官不用之云云長キ  
置おいろくふふりくく又宿老人の辨紙を

くく糸れりき二す一は四寸斗は ちり紙

ひぬり別當まに白あきものぬくを以東帯以下未

是御用なり板敷サ三枚云御辨官あきどのり板敷の  
文又も亂りみり時小志ふり一若人のあきく年ふり  
て紙守ふみくく志十歳より四段五段六段ふみ東  
帯以下用之延尉薄紙糸紙は一初め

一杉目の籠の事

杉畑横目や一板敷サ三枚金お蝶小鳥西ふ繪をりく  
裏きみり蝶多かき色く糸ゆてに紙法にすして  
けけ又紙法にすしてふりふり繪もむりけり  
きくふり一色八十五まき小東帯以下小を用く云々  
を多歩守りた月以帯に白松紙なり親王と十五まき



は横目巾用有鞠り馬の形をみよと其の扇と持し  
きく又おら馬の扇もよもゆきお供奉りて騎馬  
の時持紙淨衣の時も若敷上人装の扇紙おし用し子細  
けし

一夏扇事

公御衣女御言をり上官ハ使帯の時夏も核扇紙田創  
之宿老公に直衣衣冠おし核扇紙夏持し帯ハ直衣  
以下ハ夏ハおしり中扇之又若敷公にハ使帯おしり  
り扇紙りつと若敷上倉下使帯衣冠ハ小夏の扇  
ハ扇用し十五箇て中ハ此地の扇ハおしりつと

ハ紅ハ七八迄も用し人ハおしりつと行本ら  
るふし又別當庭尉佐淳公ハ無文花田或香白六の  
或黒白御骨朴木おしり用し式目紙上おしり亦夏  
職事急帯の時ハ使帯おしり夏扇用し

装束折

扇

宿老の出御夏おしりハ使帯直衣之時是御モ 年若ハ  
今天乞次蝙蝠冬ハ杉目泥薄 千うニ繪カキタル持也攝家  
用来ハ盛年時 両方ハ面ハ夏ノ丸御糸ニテシテ押入核扇  
ヲ持又ナセハ少ノ比白キ糸ノ間アヤミタルヲ 夏ノ扇ニ繪ラ

持向五邑前、柄ノ模目繪ヲ書クハ蝶鳥ノ辭出目ノ扇也古ハ  
摺扇ノ事次書ナト書テ持名ト見タリ

高倉家説 夏扇

獲芳骨 紅地泥繪骨教十五

玉葉永安五年五月廿五日建春門院百日御戲法結頼

左大臣持冬ノ扇左大将竊問余云直衣ニ冬扇ハ持冬云ニ余答不  
知之由一此事可尋之

麗按此事不審雖直衣宿老人可持冬ノ扇也河有流難哉

桃華葉葉扇

十五歳以前モ柄ノ模目ノ扇繪ハ松鶴亀ヤト祝物繪ノ裏

のうハ蝶小鳥代書色ハの絲少ク先をとらて糸のゆり  
張らしむしゆい小して梅の教をもくお絵花つけて扇ハ  
まきそりのやうにわめを蝶鳥のゆり少く打て用し十六  
の何ふよそしゆり用ゆるく一かハ摺扇ハ十五枚  
若年の内ハ白糸少くしらそ糸の全紙友の花ハお扱ハ  
てくれめより上二三寸物とら紙残す一ハ冬中物とほ  
ナセハシのち羽をたてをての何おれ一宿徳のたはやし  
のけい友の九紙糸とそ一ハ西子の面ハ柳也東市の  
時ハ夏も核の紙おれハ長冠直衣柄の時極熱少く編端の  
のこ子細ハ先者ハ扱のの紙代とのる一並ハ夏

城のより蝙蝠紙打人のり側多きく其宮治左府の夏

麻香深無為紙拍法仁平元長者後

常しも是所より信より日記少きは道たり又香深

扇紙拍法保延四春日祭上卿時事

内不三時抄雅有卿扇

朝多鞠小い流し夏扇拍之當家未帯の時其夏の時

之形骨なる直ふ拍ふふの細魚白知海骨多かき

きく扇の拍何よりひてころし道の長をふ年開て後

骨小檀紙拍法拍有創は振舞小い尺や骨以

後の事之仍荒涼小不可持也

山槐記文治五年七月十三日右大辨定長宰相始者直衣出位

来予亭看薄色奴袴不持扇持冬扇

法躰扇事

法躰装束抄 高倉家記

靴色着

檀扇置物系外無之又若法師首置物也

夏七時之拍凡り小さく

装束家事



後愚昧記 應安六年十二月二日

後女位下十九

經重問公忠公答

一檜扇置物事ナカリ可有之

長筋松扇下二歲持之例

後愚昧記 應安七年十二月廿七日為御即位行幸官廳

二位中將 少少実久

先申拜賀可供奉行幸 歸

裝束 扇 松扇有置物長ナ  
不銘仁奈 置之

同記 應安六年十二月十一日

從女位下十九

右兵衛佐經重問答

一明年二月御出座雖直衣不可有難欣然而衣冠不銘可宣哉

一檜扇置物事ナカリ可有之

山槐記 治承三年正月百今日中納言中將師家拜賀之後着直衣

帶野釵時給持笏

紅薄振言白草衣小繪極目扇

同記 久壽町年三月十一日 大理殿二男 忠推 為弟子始被官法

竅雲七條河原房若公裝束二重織物一尺帖紙薄極目 松扇  
書給

長秋記 大治四正八皇后官進扇二枚入内所可遺科也各三重有

銀堀物表骨右兵衛督許送女扇扇二枚

極目忌嫁娶事

長秋記

元永二年十月廿二日

三位中持有仁公  
嫁娶

織物直衣張裏織物紫指貫濃衣長濃履芳衣三濃草衣

濃下袴也着用了帶野釵持笏扇結伴扇下官詢進施

忌名儀也

尸ヤ杉之扇事

宣守僧正記

袍并持襖時御見七捨扇六位持扇十五歲山前八尸ヤ杉扇  
ヲ持ヤ綾柄ハハ名キ杉ノ木ニテ作也

櫛柳扇事

續日本記 寶龜八年八月五日己酉櫛柳扇十枚

公親卿記 正喜元年十月十三日親王御出家臨幸北院親王御同手

上皇御裝束御烏帽子直衣宮御裝束浮織物蘇芳御衣青草

紫白夏御指貫御之扇 藤葉

仲資王記建永二年四月十六日酉被召扇二枚各泥繪之

佈夏記貞治三年七月六日辰刻家君着朝衣卷四扇事計七扇 被沙以

叅記錄所

妙撰記正元二年四月廿四日酉賀茂祭杖敷御幸着布衣叅本院

顯又欲虫襖尸衣裏今日相具仕裝束有薄扇用色之然而不用之頗不叶時

儀事歎但巾依有所昂存儉約

真洛雜記賜扇事同何答弘長二年二月廿一日為尺迦堂修二月勤

仕申於扇事御所以良田賜於扇仰云是僧綯扇也且不成

僧綯先非也

同扇懷中事

問何答蓮藏院法印御房仰云扇懷中事可依所作体若用右午許時移持左午若用三午時右可懷中故仁和寺之偷法午親或人云不論一午

兩午隨後時皆可懷中木幡了并リ之酉酉振持花管時左午珠教独銘化管右午持扇故花云仁和人三扇又持左午以右午散化法印御房仰云散花午持扇不可然歎私云西面異仁和故何必同波矣

故殿御記享保十一年六月廿八日

夏扇出来被鳥見骨入年竹骨之紙薄振紅漆以金白泥繪花鳥裏落梅花長廿一寸許也

注進勘物并北祭使之古々陰木三丁准后塚照御物好出来也之親骨扇

間事

七月二日春殿下將又扇一本末廣一本給件扇八直衣始之時吟味之夏扇也竹骨十八本以一種若深表給蘭花裏蝶鳥也當時官庫有之女房扇長一尺三寸表薄也

梅川雲々裏蝶鳥雲々紅白紫萌黃作花松梅白紅蜷糸桃色黃要蝶鳥

長秋記保延元年四月十八日賀茂祭

便裝束副喉袍草元一丈半臂下襲濃打袖草衣白汗取濃裏表袴濃大口冠糸纓笏火扇飭劔代巡方紫袴平緒銀曳袋

人車記仁平三年五月一日自昨日女房為先妣追善智院能寺小堂捧物各香紙扇三枚念珠一連置之

康富記享德四<sub>五</sub>改元 予參陣予赤衣如恒時繪叙<sub>也</sub> 友也中勢浦有催之間持扇之可持以扇之由雖存之之當時依不所 持欲之扇者一向畧

### 近代大理扇事

通板御厚朴六保祿張花田紙 無画 兼階々同上隆前<sub>竹骨多</sub> 予竹骨 孫張香紙 無画 益房卿厚朴六季<sub>ナリキナリ</sub> 極有極同 張花太紙<sub>藍代</sub> 如何有彩色 陰水<sub>水辺</sub> 并賀日猶被懷中<sub>公亭之如予扇亭御</sub> 殿下賜<sub>也</sub> 扇故也

### 横目扇初年所持説

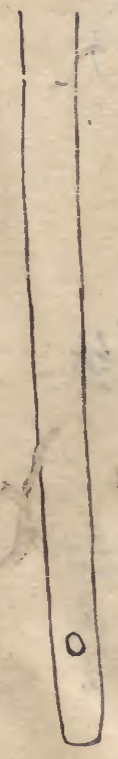
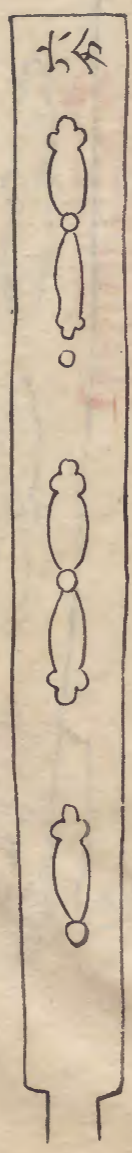
王業安元二年十二月廿二日侍後良通叙正下之後并賀也<sub>自刻者東</sub>

帶 時繪叙糸鉄平箔扇 如女房初年之所持也

西園寺新調夏扇形金巾

六寸芬

已下四寸六分

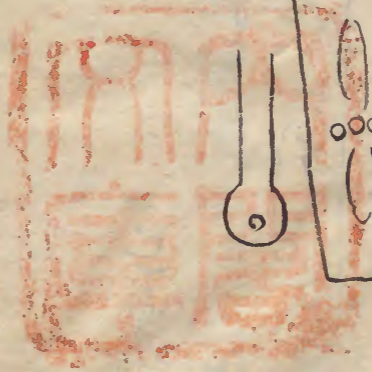




薩成記永享六年三月十五日等時寺ノ講第一日各着座  
扇於手堤裾被着座甚見苦  
 但進来人之皆以如此如何

紙間寸二分

紙下三寸六分



陽明家夏扇享保十一年再興也



